

高等学校地理歴史科における北方史の視点

- 北海道中世史から -

小川正樹(函館ラ・サール中学・高等学校教諭)

はじめに

第1章 現行教科書の記述と問題点

第2章 現在の研究成果の導入について

第3章 生徒との共同作業を通じた歴史理解

おわりに

はじめに

近年、歴史研究や考古学の研究成果が教科書にも反映されるようになり、日本列島の多様性に対する認識が深まり、筆者のいる北海道においても本州とは異なる歴史をたどってきていることを生徒に説明することは比較的容易になってきている。これは、北方世界の研究が進み、その研究成果の公開、刊行が近年さかんにおこなわれるようになったことが大きく影響している。

歴史教科書においては、日本列島をすべてまとめて1つと考える見方から、それぞれの地域の特殊性を考慮して日本をとらえる見方へと変化してきている。この歴史教科書の中で、北方世界と深いつながりを持つ北海道がどのように記述されてきたのかは非常に大きな問題であり、本稿では、教科書記述の問題点を明らかにしていくとともに、それを克服する具体的な取り組みを、筆者がこれまで参加してきた研究会やシンポジウム、調査・研究活動を通じて検討していきたい。また、こうした作業を通じて、北方世界に対する認識の問題点やそこから見えてくる歴史教育の新たな可能性についても考察していきたい。具体的には、日本列島の北辺に位置する北海道のアイヌ社会に対して、教科書の記述内容が詳細になる一方、和人(=渡道した日本人)社会からの見方を中心とした記述に終始し、アイヌ社会に対して一方的、固定的な見方、解釈が定着してしまう危険性があげられる。北海道のアイヌ社会に対する記述内容の中心は、北海道に進出した和人のアイヌに対する搾取や抑圧、そしてその支配や搾取に対するアイヌの抵抗や蜂起であり、こうした記述が支配される人々というアイヌ社会への一方的な認識を形成する危険性をもっている。この見方を是正するとともに、北方世界に対する最新の歴史研究の成果をうけて、北方世界とのつながりの中から北海道および日本列島全体の歴史を理解することが本稿の目的である。また、一国史的になりがちな歴史教科書の記述に警鐘を鳴らし、

それぞれの地域の歴史と日本列島全体の歴史、さらには広く北東アジア全体の歴史が不可分に結びついており、地域の歴史から全体の歴史を考えることが可能であることを検討することも本稿の目的である。

第1章 現行教科書の記述と問題点

現在、高等学校で使用されている日本史Bの教科書は7社が発行している12種類がある。表1はこれらの教科書を一覧にまとめたものである。この教科書の記述の中で、北海道を中心とする北方世界の記述についてまとめてみると、原始・古代については、「続縄文文化」に関する説明はほとんどの教科書が説明をしているのに対し、「擦文文化」や「オホーツク文化」に関する説明は(表2)ほとんどの教科書で本文中での説明がなく(1冊のみ説明)、脚注での説明(2冊)かテーマ学習の中での取り扱い(2冊)となっており、生徒が古代における北方世界の広がりをイメージするには極めて困難な状況にあると言わざるを得ない。次に、中世についてみてみると(表3)「道南十二館」について本文、あるいは脚注や図版等で説明(7冊)、道南地方の地図のみを掲載しているもの(3冊)となっている(表5)。「志苔館」や「志海苔古銭」については、本文、あるいは脚注や図版等で説明(7冊)となっている(表6)。こうした中世についての記述内容をまとめると、

和人の北海道南部への進出

道南十二館の成立と海産物取引

和人の搾取に対するアイヌの蜂起(コシャマインの戦い)

武田信広(蠣崎氏)による鎮圧と北海道支配

近世松前藩の成立と支配(商場知行制から場所請負制へ)

松前藩に対するアイヌの蜂起(シャクシャインの戦い)

となり、半数以上の教科書が和人の道南進出というテーマを取り上げている。しかし、教科書の限られた行数の中で、これまでの研究成果を記述するには、重要な用語を中心に説明せざるを得ない状況であり、それは、和人の進出・アイヌへの搾取 アイヌの蜂起・鎮圧 和人の支配強化という和人側からの視点で、和人の征服過程を中心に記述せざるを得ず、アイヌ社会からの視点、アイヌ社会についての記述は皆無といっても過言ではない状況である。近世においても同様の傾向が見られ(表4)、商場知行制や場所請負制などの松前藩による支配秩序の形成(11冊)やシャクシャインの戦いなどのアイヌの抵抗(10冊)については多くの教科書が本文で説明しているのに対し、アイヌと松前藩の交易品の中で特異な地位を占めている「蝦夷錦」については本文、テーマ学習を含めて説明している教科書は2冊しかなく、近世においてアイヌと松前藩の関係を考える上で必要な情報は支配・搾取や戦いの情報に限定されており、両者の交易についての記述は皆無であると言わざるを得ない。こうした和人側からの記述による教科書を読み、かつそうした視点からの授業を受けた高校生は、果たしてアイヌ社会に対してどのようなイメージを抱くであろうか。おそらく、アイヌ社会は遅れた社会であり、アイヌは和人たちから一方的に搾取され、支配されてきたというイメージが定着する可能性が高い。

アイヌおよびその社会に対して、授業をおこなうために必要な知識や情報もないまま、教科書記述を中心に授業が展開されてしまうと、アイヌ社会、アイヌの人々に対して、彼らは征服された人々である、という固定的なイメージが生徒に定着してしまう可能性が高い。現段階でアイヌ社会に対して、限られた行数の中で、できる限り研究成果を反映させる記述は（表7～表10）むしろアイヌ社会に対する認識を歪めてしまう危険性があるといわざるを得ない。特に大学入試を意識して授業をおこなっている学校では、入試必須事項の説明を重視し、アイヌ社会そのものに対する記述ではなく、アイヌの人々に対する支配がどのようにおこなわれ、それはどのような名称がつけられ、それがどのように変化してきたが重要になり、これに対してアイヌはどのような名称の戦いをおこなったのか、という知識の羅列に終始しかねない状況である。入試問題への現実的な対応としてはそうせざるを得ないとしても、アイヌ社会に対する認識は果たしてそれでいいのか疑問を強く感じる。こうした現状の中で、実際の入試問題においても、知識の羅列だけではなく、自らの考えを説明させる問題が出題されている。千葉大学文学部史学科の平成16年度入試において出題された問題では、和人とアイヌの関係に注目した問題が出題されている。そこでは、自分の考えを記述することになっており、高校で一般的な和人支配の説明しか受けていない受験生は、自分の考えをまとめて記述することはきわめて困難であろう。この入試問題に限らず、日本史の授業の中では、和人＝日本人とアイヌの関係についてはしっかりと説明しなければならず、アイヌ社会の問題から日本列島の多様性や地域性を再認識させるとともに、日本列島の歴史を客観的に考える習慣を身につけさせることはきわめて重要である。

北海道においては、アイヌ社会の歴史をどのようにして学校の授業に取り入れていくかという問題に対して、いくつかの有効な取り組みがある。ここでは代表的な3つの事例を紹介したい。第1は、アイヌ文化振興財団の編集した教授資料と⁽¹⁾、山川出版社が発行した副読本で⁽²⁾、第2は北海道日本史教育研究会のこれまでの研究活動の記録集である⁽³⁾。第3は創童舎が出版したアイヌの歴史と文化に関して、アイヌ研究の専門家がまとめた2冊の本である⁽⁴⁾。第1は、アイヌ社会に関する専門家が、アイヌ社会の歴史を学校の授業で取り上げる際の重要な資料とその説明をまとめたもので、教科書の記述とは異なり、アイヌと日本人の関係を体系的に説明している。この資料から授業用プリントを作成し、生徒にアイヌと日本人の関係を考えさせることで、アイヌ社会に対する一方的な見方を是正することが可能である。さらに第2の研究成果や、第3の専門書の発行においても、アイヌ社会や文化に関する話題を豊富に提供し、生徒の興味関心を引き出し、アイヌ社会への理解を深めることは十分に可能である。こうした、日本列島の中にあり、日本文化とは異なる文化を持つ人々の存在を認め、それを尊重していく姿勢こそ国際化を目指すうえで必要不可欠な要素であり、現在の日本人にとって一番必要なことであり、こうした認識こそが日本人の国際化、国際感覚育成につながると筆者は考える。そして、アイヌ社会を理解するための材料は、上記の参考文献にとどまらず、現在、豊富に提供されている。単なる知識から、国際理解のための重要な問題としてアイヌ社会と文化を学習することが、今後ますます重要となってくる。北海道はそうした取り組みを全国に先駆けて取り組んできており、それを継続し、かつ発信していくことが北海道で歴史教育に携わる者の責務であり、今回の報告により、その責務の一部を果たすことができることを期待する。

第2章 現在の研究成果の導入について

大学等の研究機関での最新の研究成果を高校現場に反映させようとする試みは、近年様々な形で実施されてきている。ここでは、筆者がこれまで参加してきたいくつかの研究会、高大連携を図るための取り組みについて紹介するとともに、こうした活動の特徴と今後の展望について筆者の見解をまとめてみたい。

筆者がこれまでに参加してきた研究会等の代表的なものをあげると、

「全国中・高校生歴史サミット2006 - みんなで探ろう中世の城と町 - 」(2006年)

公開シンポジウム「中世総合資料学と歴史教育 - 北方世界の交流と変容 - 」(2005年)

国際シンポジウム「ヌルカン永寧寺碑文と中世の東北アジア」(2005年)

大阪大学文学部21世紀COEプログラム「全国高等学校歴史教員研修会」(2004年)

北海道高等学校日本史教育研究会第二十二回研究大会「北奥羽・蝦夷地世界の形成と地域諸集団」(1998年)

があり、 については、次章で詳しく説明することとし、ここでは 以下について紹介し、筆者の見解をまとめていきたい。

大阪大学文学部21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」では、複雑に入り組んだ現代社会の諸問題を、複数の文化が接触する界面から検討し、新しい解釈を試みている。国家や地域を越える「横断的な知」と、研究者と一般市民を結ぶ「臨床的な知」から現代社会の社会現象にアプローチすることを目標としている。この研究の中で、「世界史」の新しい研究方法を構築し、最新の歴史学により高等学校世界史教育を刷新する方法の開発を目指し、全国高等学校歴史教員研修会が開催された。ここで、桃木至朗教授は、高等学校の授業の中で、日本史と世界史を横断する必要性を東南アジア史をテーマに説明し⁽⁵⁾、続いて森安孝夫教授も、世界史の中における中央ユーラシア史の意義を強調し教科書記述の問題点を鋭く指摘した⁽⁶⁾。ここで重要な点は、従来、周辺として一括して説明されてきた地域が、実は世界史の中で重要な役割を果たしていることを具体的事例を挙げて証明し、従来の世界史像の修正を迫っていることである。こうした視点は、日本史の中においても同様であり、北海道はこれまで日本列島の北方の辺境という認識のもとで扱われてきたが、視点をより広域に設定して、北東アジア全体の中における北海道として認識すべきである。こうした中世史・近世史に対する認識の変化は、最近の歴史学の研究成果にも反映されている。文部科学省の特定領域研究「中世考古学の総合的研究 - 学融合を目指した新領域創造」(前川要中央大学教授代表)は、近年の歴史学、考古学の研究成果から、中世の日本列島はユーラシア大陸と密接に結びついていることを様々な研究活動から明らかにし、その研究内容を公開シンポジウム「中世総合資料学と歴史教育 - 北方世界の交流と変容 - 」で紹介した⁽⁷⁾。このシンポジウムでは従来の日本史像・世界史像に再考を促すことを目的に専門家によるいくつかの提言がおこなわれた。この中でも特に、日本の北方世界については、従来の文献資料からのアプローチだけではなく、考古学や民族学の成果を積極的に取り入れていく必要性が強調された。日本列島、特に北海道の歴史は日本一国のみでとらえるのではなく、広く

北東アジアの視点でとらえることが必要であるという観点からの発表がおこなわれた。一連の発表の中で、北海道の扱われ方が問題とされ、今まで北海道は日本の朝廷との関係から説明がなされてきたが、むしろ広大な北方世界、環オホーツク海世界やアムール川下流域世界との関係で説明するべきであり、京都や鎌倉を中心とした日本列島中心の単線的な歴史叙述を改め、地域社会の視点、交易や交流を中心とした歴史叙述の必要性が強調された。こうした問題提起を受け、現行の日本史Bの教科書を改めてみると、その記述内容が極めて一国史的であることに気がつく。北海道の歴史こそ、北方世界と日本列島の交流の中心となった、劇的な歴史が展開された地域の歴史であり、日本史よりもむしろ世界史の視点でとらえ直すことが必要である。

地域の視点を日本史全体に反映させていく取り組みとして、北海道上ノ国町教育委員会の研究活動とその成果⁽⁸⁾をあげることができる。北海道の道南地方は、中世より和人が移住し、北海道の中でも比較的早くから開けた地域で、日本史の教科書でもここに進出した和人とアイヌとの関係を中心とした説明がなされる。この上ノ国町にある勝山館は、中世の道南地方における和人社会を知る絶好の遺跡であり、この勝山館の発掘成果はこれまでの北海道中世史の見方を大きく変えてきた⁽⁹⁾。こうした研究成果をもとにしたシンポジウムが、北海道高等学校日本史教育研究会の第二十二回研究大会として開催され、従来の北海道中世史への評価を大きく改めることになった。この勝山館の発掘調査は現在でも継続され、このシンポジウム以後も重要な発見がいくつかなされている。ここでは代表的事例として、発掘された遺物について取り上げる⁽¹⁰⁾。勝山館跡からは、中国産陶磁器のみならず、東南アジアの陶磁器であるルソン壺が発見され、また中国の銅銭も多数発見されている。こうしたことから、勝山館の和人社会は日本列島との交易を通じて、遠く中国や東南アジアともつながっていたことがわかる。そして、勝山館跡周辺からはこれ以外にアイヌに関する遺物が多く出土しており、勝山館周辺には多くのアイヌが居住していたことが明らかにされている。これは、勝山館はアイヌを中心とする北方世界と結び付いていたことを示しており、つまり、この勝山館こそ、広大な北方世界と日本列島、東アジア世界を結ぶ接点であり、ここを舞台に活発な交易活動が展開されていたと考えることができるのである。さらに、アイヌの骨角器やアイヌが所有していたことを示す「しろし」のついた陶磁器が館の内部や館周辺の非常に近い所から発見されていることや、勝山館後方の夷王山墳墓群にある和人の墓の間からアイヌのものとしが考えられない墓が発見されていることから、総合的に判断すると、勝山館内部にいたアイヌは、和人と共同生活をしており、かつその存在は十分に尊重されていて、決して支配されていた人々としての扱いを受けていたものではない、ということができる。つまり、アイヌは和人にとって重要な交易パートナーであり、アイヌを通じて広大な北方世界と和人社会はつながっていたのであり、和人はアイヌとの友好関係なしにはその社会を維持することは困難であったと考えざるを得ない。しかし、こうした北海道の中世の様子は、日本史の教科書には全く反映されておらず、アイヌはあくまでも搾取の対象であり、搾取に対して武装蜂起したアイヌが和人に鎮圧され、そして松前藩による支配体制が形成される、という説明がなされてしまう。こうした説明は、アイヌに対する見方を一方的にするのみならず、アイヌを通じて和人が接していた広大な北方世界についても想像することを不可能とし、アイヌをはじめとする北方狩猟民世界は、未開で野蛮な社会であり、近代になり日本やロシアにより「発見」され、搾取され、「文明化」されていった、とい

う見方につながっていき、最終的には日本やロシアによる北方少数民族への支配、差別が正当化されていく思考を生み出す危険性がある。北海道のみならず、千島や樺太、カムチャツカ半島、アムール川下流域、オホーツク海沿岸という北方世界に対する正確な記述と説明は、日本の近代北方少数民族政策のみならず、日本の植民地支配を見直すことにもつながり、さらにロシアとの友好関係を考えるうえで重要なヒントをあたえてくれる。アイヌ、ロシア、北方少数民族との関係を見直し、友好関係を築いていくヒントが、北海道の中世・近世・近代の歴史にはある。こうした歴史の発掘、そして発表が今後、北海道の教育界にとって重要な課題であり、こうした取り組みはすでに、北海道高等学校日本史教育研究会や北海道高等学校世界史研究会によりおこなわれており、前述の「中世総合資料学」のシンポジウムと研究大会を合同で開催したり、独自の研究大会を開催してその成果を出版するなど、その研究成果は広く紹介され、北海道から全国へ重要なメッセージを送り続けている。筆者のように北海道で歴史教育に携わる教員は、こうした成果を授業に反映させながら、北方世界から日本史・世界史を考える視点の構築をより積極的におこなっていかねばならない。

第3章 生徒との共同作業を通じた歴史理解

歴史研究を生徒とともにおこない、生徒が主体的に歴史研究に関わった取り組みとして、平成18年度、筆者と本校生徒が応募した「全国中・高校生歴史サミット2006」があげられる⁽¹¹⁾。これは、地元の中世の遺跡を高校生が調査し、高校生の視点を歴史研究に反映させる試みで、高校生自らが現地調査をおこない、実際に遺跡を訪れ、その調査結果を高校生が斬新なアイデアで発表するというもので、教科書とは違う、自分たちの地元の中世を考える機会を生徒に与えるという試みであった。この歴史サミットに参加した狙いは、まだ歴史学会の常識とはなっていないが、発掘現場の最前線の研究成果を高校生に紹介し、それを日本史の授業に反映させるとともに、図書館・博物館など地元の研究・調査機関を最大限活用し、歴史を自分たちに身近なものとして認識してもらうことであり、結果としてこの狙いは十分に達成されることになった。参加した生徒たちは遺跡の現地調査、研究者との直接的交流、多くの研究報告書、先行研究の調査を通して、自分たちの生活する北海道には本州にも劣らない中世の歴史が存在していたことを再認識したとともに、本州とは異なる歴史世界が広がっていたことを発見し、日本列島の中の北海道ではなく、北東アジアの中の北海道から日本列島を考える可能性を追求していくことになった。歴史サミット事務局に提出した原稿は、考古学的アプローチを中心とした他の参加校とは異なる論文調のものとならざるを得なかった。限られた遺跡・遺物の中から、中世の姿を復元することは容易ではなく、遺跡や遺物以外の多くの資料を使用せざるをえず、これが本校の提出原稿の限界であった。本校生徒が実際に調査したのは遺跡だけではなく、図書館・博物館であり、現場から図書館・博物館まで、利用できる施設をすべて利用して、自分たちの見解を作り上げた。現場に行く機会はそれほど多くはなかったが、その他の図書館等を自分たちの足で歩き回り、認識を十分に深めて自分たちの仮説を作り上げたことは、歴史サミットで入賞することよりも大きな収穫であった。

この歴史サミットにおいて本校生徒が取り組んだテーマは、志海苔古銭の謎に迫ることであった。この志海苔古銭は、現在に至るまで日本国内で発見された埋納銭としては最大規模で、発見当時に散逸したものを含めると40万枚以上にのぼると推定され、これは本州で発見された最大量の埋納銭の2倍以上の数である。しかし、この大量の埋納銭については、記録されている文書もなく、周辺の地方文書もなく、その由来、埋納者などほとんどが明らかにされていない。この古銭をどう説明するかが研究活動の中心となった。古銭についての研究・調査活動を実施していく中で、北海道の中世について再検討することになり、最終的には北海道中世における和人とアイヌの関係について再検討することになった。この研究活動の中で、生徒は中世における北方世界の富の大きさとそこに流れ込んだ銅銭の多さを実感し、これを取引していたアイヌ社会に対しても、これまでの未開で文明化されていない人々という一方的な見方を打破し、非常に豊かで、かつ高度な文化を持つ人々であり、日本列島にとどまらず広く北東アジアとつながりを持つ人々であるという認識を獲得していった。教科書にあるアイヌ社会の記述の問題点を克服する鍵が、この歴史サミットの中にあった。しかし、今回、本校の生徒たちが調査、検討した北海道、アイヌ社会についての記述を、現行教科書の中から求めることは不可能であり、むしろ、教科書以外の地域の歴史を日本史の授業に反映させることのほうがはるかに有効であることを実感した。さらに、志海苔古銭を研究して得られた成果という教科書に記載されていない歴史を教えることが、実は教科書の内容についても説明することになっていることに気付かせることができた。大量の銅銭の流入と流通、活発な交易活動、中国産陶磁器の輸入と使用、沿岸航路による国内流通網の整備、銭の蓄積と金融など、教科書の中世史の経済分野については、志海苔古銭を使用してほとんど説明することが可能である。さらに、志海苔古銭はその交易相手がアイヌ社会、北方少数民族社会であり、志海苔古銭から中世北方世界、北東アジア世界を説明することまでもが可能であり、こうした広大で豊かな世界からアイヌ文化が成立したこと、中国大陸では清朝が成立したことまでもが説明可能であり、日本史と世界史を融合させた歴史説明が可能となる。つまり、北海道の歴史から日本史と世界史を考えることが十分可能となるのである。これこそ最近の歴史学界が求めている方向性であり、高校の教育現場で一番工夫していかなければならない課題である。今回の歴史サミットへの応募は、北海道における歴史教育の可能性について検討する絶好の機会であり、参加した生徒の自己評価からそれが有効であることを強く感じる事ができた。

おわりに

本稿においては、高等学校の日本史教育の基本となる現在の日本史Bの教科書の記述内容を検討することから始まり、教科書記述の問題点とその限界を明らかにしてきた。各社の教科書を比較検討することにより、現在生徒が使用している教科書は、できる限り地方・地域の視点を取り入れてはいるが、説明が不十分な取り入れ方はかえって生徒に誤った認識を持たせる危険性があることがわかった。また、様々な歴史学・考古学の研究成果を調査することにより、教科書に記載されている歴史的事実の多くが地方にもそれぞれ存在しており、地域独自の歴史を学ぶことが、地域のみならず日本列島全

体の歴史を学ぶことになることも明らかにしてきた。特に、筆者のいる北海道は、日本列島の北辺という認識だけでは説明しきれない歴史があり、むしろ北方世界の南辺としての認識が、日本中世史の認識をより豊かにし、東京中心の教科書記述の弊害を打破する可能性を持っていることを明らかにした。北海道にある学校こそ、日本列島の歴史に対し柔軟にそして独創的にアプローチすることが可能である。こうした取り組みが日本各地でおこなわれ、東京中心の教科書に対して記述内容の修正を迫ることが、日本の歴史教育を変えていくことになる。地域から日本全体を考える方法の研究が、今後ますます活発になり、日本列島のみならず広くアジア全域の歴史と日本の歴史を結びつけたとき、私たちはさらに豊かな日本の歴史を知ることになり、周辺地域との交流の歴史を全体の視点で理解することは、国際理解にとって極めて有効であることを実感するはずである。広大で豊かな北方世界、アイヌ社会と日本列島の交流の歴史、中世のみならず近世、近代における北方世界の歴史に対する認識を深めていき、それを高等学校の歴史教育に反映させていくことが筆者のこれからの研究課題である。

注

- (1) 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構『アイヌ民族に関する指導資料』(2000年)
- (2) 田端宏・桑原真人監修『アイヌ民族の歴史と文化』山川出版社(2000年)
- (3) 入間田宣夫・小林真人・斉藤利男編『北の内海世界 - 北奥羽・蝦夷ヶ島と地域諸集団』山川出版社(1999年)
- (4) 榎森進編『アイヌの歴史と文化』創童舎(2003年)、同『アイヌの歴史と文化』創童舎(2004年)
- (5) 桃木至朗『歴史世界としての東南アジア』(世界史リブレット12)山川出版社(1996年)
- (6) 森安孝夫『シルクロードと唐帝国』講談社(2007年)
- (7) 天野哲也・臼杵勲・菊池俊彦編『北方世界の交流と変容 - 中世の北東アジアと日本列島』山川出版社(2006年)
- (8) 上ノ国町教育委員会『史跡上之国町勝山館跡 ~ (1980~2005年)』上ノ国町教育委員会『夷王山墳墓群(1、2)』(1984、1991年)
- (9) 松崎水穂「勝山館跡とその城下の謎 - 発掘調査20年の成果と課題」『北から見直す日本史』大和書房(2001年)
- (10) 松崎水穂「上ノ国町・勝山館跡発掘のアイヌ資料」『北太平洋の先住民交易と工芸』思文閣出版(2003年)
- (11) 中央大学全国中・高校生歴史サミット実行委員会『全国中・高校生歴史サミット2006 - みんなで探ろう城と町 - 』発表資料集・応募論文集(2006年)

高等学校地理歴史科における北方史の視点

表1 平成19年度高等学校「日本史B」教科書一覧

No.	書名	発行者	記号番号	著作者
1	詳説日本史B	山川出版社	日B001	石井進 ほか11名
2	高等学校 最新日本史	明成社	日B002	村尾次郎 ほか28名
3	新選日本史B	東京書籍	日B003	尾藤正英 ほか7名
4	日本史B	東京書籍	日B004	山本博文 ほか11名
5	高校日本史B	実教出版	日B005	宮原武夫 ほか14名
6	日本史B	実教出版	日B006	脇田修 ほか12名
7	日本史B	三省堂	日B007	青木美智男 ほか12名
8	高等学校 日本史B	清水書院	日B008	伊藤純郎 ほか10名
9	高校日本史	山川出版社	日B009	石井進 ほか12名
10	新日本史	山川出版社	日B010	大津透 ほか4名
11	新日本史B	桐原書店	日B011	宮地正人 ほか10名
12	詳説日本史B 改訂版	山川出版社	日B012	石井進 ほか11名

表2 平成19年度高等学校「日本史B」教科書記述比較一覧(原始・古代)

教科書		原始・古代			
発行	番号	続縄文文化	擦文文化	オホーツク文化	アイヌ文化
山川	001	脚注	脚注	脚注	交易のみ記述
	009	なし	なし	なし	交易のみ記述
	010	本文	なし	なし	交易のみ記述
	012	脚注	脚注	脚注	交易のみ記述
東書	003	脚注	歴史の追及	歴史の追及	交易のみ記述
	004	本文 歴史の追及	本文 歴史の追及	本文 歴史の追及	歴史の追及
実教	005	脚注	なし	なし	なし
	006	本文	なし	なし	交易のみ記述
三省堂	007	本文	なし	なし	交易のみ記述
清水	008	脚注	地図中(説明無)	地図中(説明無)	先住民と記述
桐原	011	本文	テーマ学習5	テーマ学習5	テーマ学習5
明成社	002	本文	なし	なし	交易のみ記述

表3 平成19年度高等学校「日本史B」教科書記述比較一覧(中世)

教科書		中世				
発行	番号	道南十二館	志苔館	志海苔古銭	コシャマインの蜂起	上之国蠣崎氏
山川	001	本文、脚注 地図掲載	脚注	脚注	本文	本文
	009	なし	なし	なし	なし	松前氏のみ
	010	地図掲載	本文	本文	本文	本文
	012	本文、脚注 地図掲載	脚注	脚注	本文	本文
東書	003	地図掲載	説明なし	なし	本文	本文
	004	写真の説明	写真掲載	写真の説明	本文	本文
実教	005	なし	本文	本文 写真掲載	なし	なし
	006	脚注	脚注	脚注 写真掲載	本文	本文
	007	館主と記述 地図掲載	なし	なし	本文	本文
清水	008	館主と記述	なし	なし	本文	本文
桐原	011	地図掲載	脚注	脚注	本文	本文
明成社	002	館のみ記述	なし	なし	本文	本文

表4 平成19年度高等学校「日本史B」教科書記述比較一覧(近世)

教科書		近世				
発行	番号	商場知行制	シャクシャインの蜂起	場所請負制	クナシリ・メナシの蜂起	蝦夷錦
山川	001	脚注	本文	本文	なし	なし
	009	本文	本文	なし	なし	なし
	010	本文	本文	なし	なし	なし
	012	脚注	本文	本文	なし	なし
東書	003	コラム説明	本文	コラム説明	コラム説明	写真掲載
	004	本文	本文	本文	本文	なし
実教	005	なし	なし	なし	なし	なし
	006	本文	本文	本文	なし	なし
三省堂	007	本文	本文	本文	本文	本文
清水	008	本文	なし	本文	なし	地域社会の歴史と文化4
桐原	011	本文	本文	本文	本文	なし
明成社	002	本文	本文	なし	なし	なし

表5 平成19年度高等学校「日本史B」教科書記述比較一覧(中世)

教科書		中世
発行	番号	道南十二館
山川	001	やがて人びとは本州から、蝦夷ヶ島とよばれた北海道の南部に進出し、各地の海岸に港や館(道南十二館)を中心にした居住地をつくった。(P.132)
	009	記述なし
	010	さらに14世紀末から15世紀にかけて、蝦夷ヶ島の南部の渡島半島沿岸には和人の居住地がつくられ、湊や館が整備された。(P.142)
	012	やがて人びとは本州から、蝦夷ヶ島とよばれた北海道の南部に進出し、各地の海岸に港や館(道南十二館)を中心にした居住地をつくった。(P.132)
東書	003	蝦夷地では、広大な自然のなかで、狩猟や漁業をいとなむアイヌ民族が、いくつものコタン(共同体)をつくって生活していた。14世紀ごろ、本州から武士たちが移住し、たがいに争いをつけていたが、そのなかから蠣崎氏(のちの松前氏)がでて南部地域を支配した。(P.87)
	004	北海道(蝦夷ヶ島)には早くからアイヌが住み着き、狩猟と漁労に中心をおく生活が営まれていたが、13世紀末には日本人(和人)の活動が渡島半島にも及ぶようになった。和人は港や館を拠点にアイヌと交易し、サケ、昆布、毛皮など北方の産物を得た。(P.134)
実教	005	記述なし
	006	和人たちは津軽の安藤(東)氏の支配下にあり、沿岸沿いに点々と居住地をひろげ、有力者は館をきずいて館主といわれる領主に成長し、貿易の利益を独占しようとした。(P.136) *脚注:和人の館は道南十二館といわれて渡島半島南部に点在していた。
三省堂	007	その後、安藤氏が十三湊から蝦夷地の渡島半島南部に移ると、つぎつぎと移り住む者があられ、各地の有力者は館主とよばれる領主となった。(P.113)
清水	008	そののち、渡島半島を中心とする道南地域に本州人(和人)が移り住むようになり、和人の豪族たちはチャシとよばれる館に住んで割拠した。彼らは先住民のアイヌを圧迫したため、1457年にアイヌはコシャマインを中心に蜂起した。(P.81)
桐原	011	鎌倉時代の中ごろから、和人(日本人)の蝦夷地(北海道)への進出が始まった。和人は北海道南部の渡島半島に館という居留地をつくって、アイヌと交易をおこない、ラッコの皮や昆布を入手し、津軽の十三湊をへて京都方面に送った。(P.154)
明成社	002	やがて、奥州の住人のなかには、渡島半島に館をつくって移り住む者もあらわれた。(P.98)

高等学校地理歴史科における北方史の視点

表6 平成19年度高等学校「日本史B」教科書記述比較一覧(中世)

教科書		中世
発行	番号	志苔館・志海苔古銭
山川	001	その一つ、函館市にある志苔館からは、14世紀末から15世紀初めころうめられた合計約37万枚の中国銭が出土しており、この地域の経済的繁栄を物語っている。(P.132)
	009	記述なし
	010	館の一つである函館東部の志苔(志濃里)館では、大量の古銭や越前・能登で制作された大甕が発掘されている。(P.142)
	012	その一つ、函館市にある志苔館からは、14世紀末から15世紀初めころ埋められた合計約37万枚の中国銭が出土しており、この地域の経済的繁栄を物語っている。(P.132)
東書	003	記述なし
	004	館とは堅牢な土壘で囲まれた和人の居館群。15世紀、道南には志苔館、箱館など道南十二館と総称される館があった。志苔館からは最近、能登産の大瓶や40万枚にのぼる明銭が発掘された。*写真掲載(P.135)
実教	005	1968(昭和43)年、北海道函館市志苔町の道路工事の現場から、古銭がぎっしりつまった大甕が3個出土した。銭は発見されただけでも37万枚をこし、ほとんどが宋銭など中国の銭であった。(P.84)
	006	和人の館は道南十二館といわれて渡島半島南部に点在していた。その一つである志苔館(函館市)からは、計40万枚にもおよぶ中国古銭をいれた越前焼と珠洲焼(能登)の大甕3個が発見されている。*写真掲載(P.137)
三省堂	007	記述なし
清水	008	記述なし
桐原	011	津軽海峡に面した道南の南端に、陥落した志苔館跡がある。館跡から40万枚にのぼる銅銭が発掘された。(P.154)
明成社	002	記述なし

表7 高等学校「日本史B」教科書記述比較(山川出版社、詳説日本史)
最近20年における教科書記述内容の変遷

教科書		記述内容
発行年	項目	
昭和61年 (1986年)	続縄文文化 (脚注) (P.17)	北海道でも鮭・鱒などの食料採取に依存する『続縄文文化』がさかえた。
	道南十二館 (コラム) (P.215)	和人とよばれる本土の日本人が蝦夷ヶ島とよばれた北海道の南部へ進出しはじめたのは13世紀ごろであった。15世紀には津軽の豪族安東氏の武将蠣崎氏がアイヌの首長コシャマインの反乱をはずめ、道南に勢力をのばした。
	志海苔古銭	記述なし
	松前藩 (コラム) (P.215)	近世になると、蠣崎氏は松前氏と改姓して道南の和人居住地に根拠をかまえ、その外側に広がる広大な蝦夷地を支配した。松前氏は蝦夷地交易の独占権をもち、その権利を家臣に分与する体制をとった。和人の商人は米・綿布・鉄器などを高く売りつけ、アイヌの漁獲物を安く買いとった。このためアイヌの不満が高まり、17世紀半ばにはシャクシャインの反乱がおこったが、松前氏は武力でこれを鎮圧し、和人の進出はいっそうはげしくなった。
明治以降 (コラム) (P.215)	明治以降、蝦夷地は北海道と改称され、内地人の北海道進出とアイヌ同化政策が進んでいったが、これについてゆけないアイヌの悲劇もおこっている。	

平成7年 (1995年)	縄文文化 (脚注) (P.15)	縄文文化が今日の日本列島全域におよんだのに対して、弥生文化は北海道や南西諸島にはおよばず、北海道では「縄文文化」、南西諸島では「貝塚文化」とよばれる食料採取文化が続いた。また、北海道では9世紀以降になると、擦文土器をともなう擦文文化が成立するが、この文化も漁撈・狩猟に基礎をおく文化である。
	琉球と蝦夷ヶ島 (本文、項目設定) (P.126)	すでに14世紀には畿内と津軽の十三湊とを結ぶ日本海交易がさかんにおこなわれ、サケ・コンブなど北海の産物が京都にもたらされた。やがて南から津軽海峡をわたった人びとは、蝦夷ヶ島とよばれた北海道の南部に進出し、各地の海岸に港や館を中心にした居住地をつくった。彼らは和人といわれ、津軽の豪族安藤氏の支配下に属して勢力を拡大した。 ふるくから北海道に住み、漁り・狩りや交易を生業としていたアイヌは和人と交易をおこなった。だが新来の和人の圧迫にたえかねたアイヌは、やがて1457(長禄元)年、大首長コシャマインを中心に蜂起し、和人居住地はほとんどせめ落とされた。わずかに上ノ国の領主蠣崎氏のみがもちこたえ、ついに勝利をつかむことに成功した。以後、蠣崎氏は道南地域の和人居住地域の支配者に成長し、江戸時代には松前氏と名のって蝦夷地を支配する大名となった。
	道南十二館 (脚注) (P.126)	これらの居住者たちの館は、渡島半島の南部一帯の海岸ぞいに連なり、道南十二館と通称されている。その一つ、函館市にある志苔館からは、越前や能登の珠洲で焼かれた大甕3個のなかに合計約40万枚にのぼる、おもに中国の古銭がおさめられたまま発掘された。この古銭がうめられた時期はおよそ15世紀前半ごろと推定され、これまで日本で1カ所から発掘された古銭としては最大の量である。当時のこの地域での経済的繁栄を物語る事実といえよう。
	朝鮮と琉球・蝦夷地 (本文、項目設定) (P.179)	蝦夷ヶ島の和人居住地(道南部)に勢力を持っていた蠣崎氏は、近世になると松前氏と改称して、1604(慶長9)年徳川家康からアイヌとの交易独占権を保障され、藩制をしいた。和人居住地以外の広大な蝦夷地の河川流域などに居住するアイヌ集団との交易対象地域は、商場あるいは場所とよばれ、そこでの交易収入が家臣にあたえられた。アイヌ集団は、1699(寛文9)年シャクシャインを中心に松前藩と対立して戦闘になったが、松前藩は津軽藩の協力を得て鎮圧した。このシャクシャインの戦いを最後に、アイヌは全面的に松前藩に服従させられ、さらに享保～元文期(1716～40)年ころまでには、多くの商場が和人商人の請負となった(場所請負制度)。
	アイヌ社会 (脚注) (P.179)	アイヌたちは、この段階ではもはや自立した交易の相手ではなく、漁場などで和人商人に使われる立場にかわっていた。和人はアイヌを交易でごまかしたり、酷使したりして、うらみをかうことが多かった。
平成10年 (1998年)	縄文文化 (脚注) (P.15)	縄文文化が今日の日本列島全域におよんだのに対して、弥生文化は北海道や南西諸島にはおよばず、北海道では「縄文文化」、南西諸島では「貝塚文化」とよばれる食料採取文化が続いた。また、北海道では9世紀以降になると、擦文土器をともなう擦文文化が成立するが、この文化も漁撈・狩猟に基礎をおく文化である。
	琉球と蝦夷ヶ島 (本文、項目設定) (P.125)	すでに14世紀には畿内と津軽の十三湊とを結ぶ日本海交易がさかんにおこなわれ、サケ・コンブなど北海の産物が京都にもたらされた。やがて南から津軽海峡をわたった人びとは、蝦夷ヶ島とよばれた北海道の南部に進出し、各地の海岸に港や館を中心にした居住地をつくった。彼らは和人といわれ、津軽の豪族安藤氏の支配下に属して勢力を拡大した。 ふるくから北海道に住み、漁り・狩りや交易を生業としていたアイヌは和人と交易をおこなった。だが新来の和人の圧迫にたえかねたアイヌは、やがて

		1457（長祿元）年、大首長コシャマインを中心に蜂起し、和人居住地はほとんどせめ落とされた。わずかに上ノ国の領主蠣崎氏のみがもちこたえ、ついに勝利をつかむことに成功した。以後、蠣崎氏は道南地域の和人居住地域の支配者に成長し、江戸時代には松前氏と名のって蝦夷地を支配する大名となった。
道南十二館 （脚注） （P.126）		これらの居住者たちの館は、渡島半島の南部一帯の海岸ぞいに連なり、道南十二館と通称されている。その一つ、函館市にある志苔館からは、越前や能登の珠洲で焼かれた大甕3個のなかに合計約40万枚にのぼる、おもに中国の古銭がおさめられたまま発掘された。この古銭がうめられた時期はおよそ15世紀前半ごろと推定され、これまで日本で1カ所から発掘された古銭としては最大の量である。当時のこの地域での経済的繁栄を物語る事実といえよう。
朝鮮と琉球・ 蝦夷地 （本文、項目 設定） （P.179）		蝦夷ヶ島の和人居住地（道南部）に勢力を持っていた蠣崎氏は、近世になると松前氏と改称して、1604（慶長9）年徳川家康からアイヌとの交易独占権を保障され、藩制をしいた。和人居住地以外の広大な蝦夷地の河川流域などに居住するアイヌ集団との交易対象地域は、商場あるいは場所とよばれ、そこでの交易収入が家臣にあたえられた。アイヌ集団は、1699（寛文9）年シヤクシャインを中心に松前藩と対立して戦闘になったが、松前藩は津軽藩の協力を得て鎮圧した。このシヤクシャインの戦いを最後に、アイヌは全面的に松前藩に服従させられ、さらに享保～元文期（1716～40）年ころまでには、多くの商場が和商人の請負となった（場所請負制度）。
アイヌ社会 （脚注） （P.179）		アイヌたちは、この段階ではもはや自立した交易の相手ではなく、漁場などで和商人に使われる立場にかわっていた。和人はアイヌを交易でごまかしたり、酷使したりして、うらみをかうことが多かった。
アイヌ支配 （脚注） （P.244）		開発の陰で、アイヌは伝統的な生活・風俗・習慣・信仰を失っていった。政府は1899（明治32）年に北海道旧土人保護法を制定したが、アイヌの生活や文化の破壊をくい止めるものにはならなかった。1997（平成9）年にはあらたにアイヌ新法が制定された。
平成15年 （2003年）	続縄文文化 （脚注） （P.12）	縄文文化が今日の日本列島全域におよんだのに対して、弥生文化は北海道や南西諸島にはおよばず、北海道では「続縄文文化」、南西諸島では「貝塚文化」とよばれる食料採取文化が続いた。また、北海道では9世紀以降になると、擦文土器をともなう擦文文化やオホーツク式土器をともなうオホーツク文化が成立するが、これらの文化も漁撈・狩猟に基礎をおく文化である。
	道南十二館 （本文、項目 設定） （P.132）	すでに14世紀には畿内と津軽の十三湊とを結ぶ日本海交易がさかんにおこなわれ、サケ・コンブなど北海の産物が京都にもたらされた。やがて人びとは本州から、蝦夷ヶ島とよばれた北海道の南部に進出し、各地の海岸に港や館（道南十二館）を中心にした居住地をつくった。彼らは和人といわれ、津軽の豪族安藤（東）氏の支配下に属して勢力を拡大した。 古くから北海道に住み、漁労・狩猟や交易を生業としていたアイヌは和人と交易をおこなった。和人の進出はしだいにアイヌを圧迫し、たえかねたアイヌは1457（長祿元）年、大首長コシャマインを中心に蜂起し、一時は和人居住地のほとんどをせめ落としたが、まもなく上ノ国の領主蠣崎氏によってしずめられた。それ以後、蠣崎氏は道南地域の和人居住地の支配者に成長し、江戸時代には松前氏と名乗って蝦夷地を支配する大名となった。
	志海苔古銭 （脚注） （P.132）	その一つ、函館市にある志苔館からは、14世紀末から15世紀初めごろうめられた合計約37万枚の中国銭が出土しており、この地域の経済的繁栄を物語っている。

<p>朝鮮と琉球・蝦夷地 (本文、項目設定) (P.176)</p>	<p>蝦夷ヶ島の和人居住地(道南部)に勢力を持っていた蠣崎氏は、近世になると松前氏と改称して、1604(慶長9)年徳川家康からアイヌとの交易独占権を保障され、藩制をしいた。和人居住地以外の広大な蝦夷地の河川流域などに居住するアイヌ集団との交易対象地域は、商場あるいは場所とよばれ、そこでの交易収入が家臣にあたえられた。アイヌ集団は、1699(寛文9)年シャクシャインを中心に松前藩と対立して戦闘になったが、松前藩は津軽藩の協力を得て鎮圧した。このシャクシャインの戦いを最後に、アイヌは全面的に松前藩に服従させられ、さらに18世紀前半ごろまでには、多くの商場が和商人の請負となった(場所請負制度)。</p>
--	--

表8 山川出版社「詳説日本史」教科書における北方世界取り扱いの変遷

発行年	記述形式	
昭和61年 (1986年)	コラム	第8章第3節「幕府の衰退と近代への動き」の「列強の接近」の幕末の北方探検に関するコラムとして「アイヌと和人」が説明されている。独立した項目は設定されていない。
平成7年 (1995年)	本文	第5章第1節「室町幕府の成立」の中で、「琉球と蝦夷ヶ島」として独立した項目が設定され、和人とアイヌについての説明が詳しくされるようになる。さらに脚注には、「道南十二館」と志海苔古銭についての説明が加えられる。第6章第2節「幕藩体制の成立」の中では、「朝鮮と琉球・蝦夷地」という項目が設定され、他の外交関係と同列に蝦夷地に関する記述がなされ、さらに松前藩のアイヌ支配についても詳しい記述がなされるようになる。
平成15年 (2003年)	本文	第5章第2節「幕府の衰退と庶民の台頭」の中で、「琉球と蝦夷ヶ島」として独立した項目が設定され、和人とアイヌについての説明がなされ、脚注には、「道南十二館」と志海苔古銭についての説明がなされる。第6章第3節「幕藩体制の成立」の中では、「朝鮮と琉球・蝦夷地」という項目が設定され、他の外交関係と同列に蝦夷地に関する記述がなされ、松前藩のアイヌ支配についても記述がなされる。第9章第3節「立憲国家の成立と日清戦争」の「殖産興業」の項目の中で、北海道開発の脚注で北海道旧土人保護法の制定と、アイヌ新法の制定についての説明が追加される。

表9 高等学校「日本史B」教科書記述比較一覧(東京書籍、日本史B)
最近20年における教科書記述内容の変遷

教科書		記述内容
発行年	項目	
平成元年 (1989年) 新訂日本史 (日史045)	田沼時代 (本文) (P.193)	狩猟や漁業をいとなむアイヌの住んでいた蝦夷地では、14~15世紀になると本土から人びとが移住してアイヌと対立し、やがてそのなかから蠣崎氏がでて蝦夷地南部を統一した。蠣崎氏はのちに松前と改姓し、17世紀はじめに幕府から蝦夷地における交易権を認められ、松前藩をたてた。松前藩では米が収穫できないので、家臣たちは、知行地におけるアイヌとの交易によって生計をたてていた。その後、本土の商人が進出して、運上金と引きかえに知行地での交易を独占し、やがて商人みずからが大規模な漁業経営にのりだすと、アイヌは生業を圧迫されて、窮乏していった。そのため、1789(寛政元)年には、国後島でアイヌが蜂起した。

高等学校地理歴史科における北方史の視点

	北海道開拓 (脚注) (P.239)	蝦夷地を北海道と改称し、1874年には土族授産のための屯田兵制度を設け、1876年には札幌農学校を開校した。1890年代以降、東北地方を中心とする農民の大量移住によって開発が急速にすすむと、狩猟や漁業などの生業がさらに圧迫されたアイヌの人々は困窮化し、政府の同化政策もあって内地人との同化を余儀なくされた。
平成4年 (1992年) 改定日本史 (日B061)	鎖国以後の外 交と貿易 (本文) (P.171)	蝦夷地では、広大な自然のなかで狩猟や漁業をいとなむアイヌの人々が居住していたが、その南端を支配する松前藩では、領内で米を収穫することができないので、家臣たちはアイヌとの交易によって生計をたてていた。このため本土で産出された食料や衣類と、アイヌの漁獲物との交易がさかんにおこなわれた。
	同所 (脚注) (P.171)	14 - 15世紀ごろより、本土から武士たちが蝦夷地に移住して、互いに対立を続けていたが、かれらのあいだから蠣崎氏がでて蝦夷地南部を統一した。さらに松前と改姓し、秀吉や家康から蝦夷地における交易権を認められ、松前藩をたてた。 1669(寛文9)年、松前藩の不正な交易に不満をもったアイヌは、首長シャクシャインにひきいられて反乱をおこした(シャクシャインの乱)。
	田沼時代 (本文) (P.192)	このころ本土の商人が進出して、運上金と引きかえに松前藩の知行地での交易を独占するようになった。やがて商人みずからが大規模な漁業経営にのりだすと、アイヌは生業を圧迫されて、窮乏していった。
	北海道開拓 (脚注) (P.239)	蝦夷地を北海道と改称し、1874年には土族授産のための屯田兵制度を設け、1876年には札幌農学校を開校した。1890年代以降、東北地方を中心とする農民の大量移住によって開発が急速にすすむと、狩猟や漁業などの生業がさらに圧迫されたアイヌの人々は困窮化し、政府の同化政策もあって内地人との同化を余儀なくされた。
平成6年 (1994年) 日本史B (日B554)	鎖国以後の外 交と貿易 (本文) (P.171)	蝦夷地では、広大な自然のなかで狩猟や漁業をいとなむアイヌの人々が居住していたが、その南端を支配する松前藩では、領内で米を収穫することができないので、家臣たちはアイヌとの交易によって生計をたてていた。このため本土で産出された食料や衣類と、アイヌの漁獲物との交易がさかんにおこなわれた。
	同所 (脚注) (P.171)	14 - 15世紀ごろより、本土から武士たちが蝦夷地に移住して、互いに対立を続けていたが、かれらのあいだから蠣崎氏がでて蝦夷地南部を統一した。さらに松前と改姓し、秀吉や家康から蝦夷地における交易権を認められ、松前藩をたてた。 1669(寛文9)年、松前藩の不正な交易に不満をもったアイヌは、首長シャクシャインにひきいられて蜂起したが敗れた(シャクシャインの戦い)。
	田沼時代 (本文) (P.192)	このころ本土の商人が進出して、運上金と引きかえに松前藩の知行地での交易を独占するようになった。やがて商人みずからが大規模な漁業経営にのりだすと、アイヌは生業を圧迫されて、窮乏していった。
	北海道開拓 (脚注) (P.239)	蝦夷地を北海道と改称し、1874年には土族授産のための屯田兵制度を設け、1876年には札幌農学校を開校した。1890年代以降、東北地方を中心とする農民の大量移住によって開発が急速にすすむと、狩猟や漁業などの生業がさらに圧迫されたアイヌの人々は困窮化し、政府の同化政策もあって内地人との同化を余儀なくされた。
平成10年 (1998年) 日本史B (日B622)	鎖国以後の外 交と貿易 (本文) (P.165)	蝦夷地の南端を支配する松前藩では、領内で米を収穫することができないため、家臣たちはアイヌとの交易によって生計をたてていた。このため本土で産出された食料や衣類と、アイヌの漁獲物との交易がさかんにおこなわれた。こうしたなかで、藩から交易を請け負った和人の商人が、わずかな米などを

		大量の海産物と交換して大きな利益をあげていたため、不満をもったアイヌは1669（寛文9）年、首長シャクシャインのよびかけに応じて松前藩と戦ったが、敗北した（シャクシャインの戦い）。
同所 （脚注） （P.165）		14～15世紀ごろより、本土から武士たちが蝦夷地に移住して、互いに対立を続けていたが、かれらのあいだから蠣崎氏がでて蝦夷地南部を統一した。さらに松前と改姓し、秀吉や家康から蝦夷地における交易権を認められ、松前藩をたてた。
田沼時代 （本文） （P.186）		蝦夷地では本土の商人が進出して、運上金とひきかえにアイヌとの交易を独占するようになった。やがて商人みずからが大規模な漁業経営にのりだすと、アイヌは生業を圧迫されて、窮乏していった。
北海道開拓 （脚注） （P.232）		1874年には土族授産のための屯田兵制度を設け、1876年にはアメリカ人クラークを招いて札幌農学校を開校した。1890年代以降、東北地方を中心とする農民の大量移住によって開発が急速にすすむと、狩猟や漁業などの生業がさらに圧迫されたアイヌの人々は困窮化し、政府の同化政策もあって内地人との同化を余儀なくされた。
平成15年 （2003年） 日本史B （日B004）	東北日本と南 西日本 （P.59）	7世紀ころ、東北北部および北海道の社会は、縄文文化から擦文文化へと移行した。擦文文化の社会では、漁労・狩猟を中心としながらも、一部雑穀の栽培も行われ、土器の製法などには本州からの影響が強くみられる。また、同じころ、北海道のオホーツク海沿岸では、大型海獣の狩猟を特徴とするオホーツク文化が栄えた。これらの文化は、12世紀からはじまるアイヌ文化の直接的な基礎となった。
	蝦夷地の情勢 （本文） （P.134）	北海道（蝦夷ヶ島）には早くからアイヌが住み着き、狩猟と漁労に中心をおく生活が営まれていたが、13世紀末には日本人（和人）の活動が渡島半島にも及ぶようになった。和人は港や館を拠点にアイヌと交易し、サケ、昆布、毛皮などの北方の産物を得た。その産物は日本海水運によって京都にもたらされたが、北方と京都を結ぶ交易の結節点となったのは津軽半島の十三湊で、ここに拠点を置く安東氏が津軽や蝦夷地の和人たちを支配下においていた。和人の活動が活発になるにしたがって、アイヌとの摩擦もふえていった。和人による圧迫にたえかねたアイヌは、1457（長祿元）年、大首長コシヤマインを中心に蜂起して館のほとんどを攻め落とししたが、上ノ国の領主蠣崎氏のみが残って蜂起を鎮圧した。
	同所 写真・解説 （P.135）	館とは堅牢な土塁で囲まれた和人の居館群。15世紀、道南には志苔館、箱館など道南十二館と総称される館があった。志海館からは最近、能登産の大瓶や40万枚にのぼる明銭が発掘された。
	鎖国下の貿易 （本文） （P.181）	鎖国によって、日本に來航するのはオランダ船と中国船に限られ、開港場は長崎のみになった。ただし、朝鮮とは対馬藩を、琉球とは薩摩藩を介して貿易が行われた。アイヌの人々とも、松前藩を介して貿易が行われた。
	朝鮮・琉球と 蝦夷地 （本文） （P.183）	蝦夷地の南端を支配する松前藩は、領内で米がとれないため、知行の代わりに特定場所でのアイヌとの交易権を家臣たちに与えていた（商場知行制）。このため、本土で産出された食料や衣類と昆布・鮭などの海産物や毛皮などとの交易がさかに行われていた。アイヌは、松前藩の不当な交易に不満をもち、1669（寛文9）年、漁猟権をめぐるアイヌ内部の争いを契機に首長シャクシャインを頭にして松前藩と戦った。松前藩は津軽藩などの協力を得て、これを鎮圧した。これをシャクシャインの戦いという。この戦いの後、アイヌは全面的に松前藩の支配下におかれることになった。
	同所 （脚注） （P.183）	蝦夷地南部を統一した蠣崎慶広は、秀吉や家康から蝦夷地における交易権を認められ、松前と改姓し、1万石に相当する大名として遇された。

蝦夷地とロシアの進出 (本文) (P.216)	松前藩が蝦夷地で行った交易業務は、17世紀後半にはしだいに商人が請け負うようになり、年限を決めて大規模な資本を投下する商人もあらわれた。これを場所請負人制度という。蝦夷地は鮭やにしんの漁場としての役割も高まり、また18世紀半ばからは、いりこ(煎海鼠)・干しあわび・ふかのひれなどが俵物として長崎に送られるようになり、蝦夷地が俵物の最大の生産地となった。こうしたなか、請負人のなかにはアイヌを酷使して大規模な網漁を行うものもあった。1789(寛政元)年、場所請負商人の過酷な支配に抗し、クナシリ・メナシのアイヌの蜂起がおこり、幕府はアイヌの離反とロシアの接近に対する危機感をつのらせた。
殖産興業と財閥の誕生 (本文) (P.259)	また政府は、1869(明治2)年に開拓使を設置し、北海道(旧蝦夷地)を管轄させた。開拓使はアメリカから御雇外国人ケブロンを顧問としてアメリカ西部開拓を模倣した開発政策を推進し、また、札幌農学校を設立して大農場制度の導入をはかった。近代的な土地所有権の確立は、共有地に依存するアイヌ民族の狩猟生活を圧迫した。さらに、政府の政策に基づいて移住した屯田兵や一般農民による原野の開発も、アイヌの生活圏を狭めた。政府はアメリカの先住民同化政策を模倣してアイヌ民族に農耕を奨励したが成功せず、アイヌ民族の人口は減少を続けた。
地方制度 (本文) (P.270)	また北海道では、北海道旧土人保護法(1899年)によってアイヌ民族に対する同化政策が強化された。

表10 東京書籍「日本史B」教科書における北方世界取り扱いの変遷

発行年	記述形式	
平成元年 (1989年)	本文中の説明	第3章第4節「封建社会の動揺と庶民文化の発達」の「幕藩体制の動揺と対外問題の発生」の田沼時代に関する説明として「アイヌと和人」が説明されている。独立した項目は設定されていない。
平成4年 (1992年)	本文	第3章第4節「近世社会の動揺と庶民文化の発達」の「幕藩体制の動揺と対外問題の発生」の田沼時代に関する説明の中の「アイヌと和人」が分割され、独立した項目として第3章第2節「幕藩体制の成立」の「鎖国」の項目で、中国・朝鮮と同列に説明され、中世に関する部分は、その脚注において説明が補足されるようになる。
平成15年 (2003年)	本文	第4章第1節「平安京と律令制の再編」の中に、「東北日本と南西日本」という独立した項目が設定されるようになり、ここで北海道の古代史(擦文文化・オホーツク文化)が詳しく説明されるようになる。 第7章第3節「明帝国の成立と日本社会」では、「蝦夷地の情勢」として独立した項目で北海道・東北地方の中世史が説明され、十三湊と志苔館の写真が掲載され、詳しい説明もなされるようになる。 第10章第2節「キリスト教禁止と鎖国」では、「朝鮮・琉球と蝦夷地」という項目で松前藩による蝦夷地支配とアイヌの抵抗について詳しい説明を加えている。アイヌとの交易については『津軽一統志』を掲載し、松前藩によるアイヌ収奪を史料から読み取らせようとする工夫が見られる。 第12章第2節「寛政の改革と海防問題」では、「蝦夷地とロシアの進出」と項目を設定し、蝦夷地の情勢とロシアの南下を結びつけて説明しようとする工夫がなされ、蝦夷地のアイヌ支配の問題を国内の問題のみならず、世界史的視点からとらえようとする意欲的な工夫がなされている。

【参考資料】 平成16年 千葉大学入試問題 前期日程（文学部史学科） 大問1

問5 図1・2は、近世と近代における支配者とアイヌの関係を象徴的に描いている。この点に留意しつつ、蝦夷地・北海道の歴史の歩みについて、考えるところを述べなさい。



図1：「北海道鯨大漁概況之図」
（拾枚続の内 北海道大学附属図書館蔵）

* 1881年（明治14）に行われた明治天皇の北海道
巡行の様子を伝える錦絵

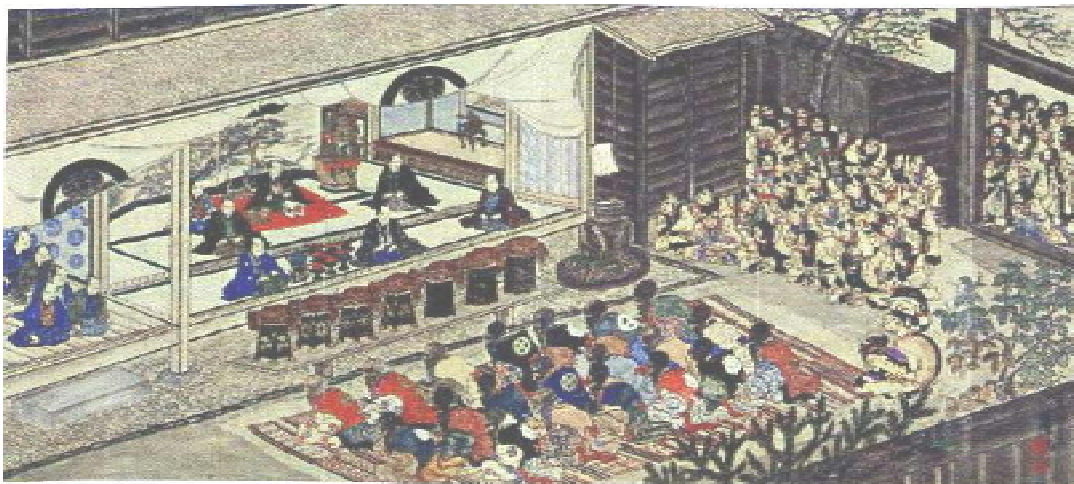


図2：「日高アイヌ・オムシャ之図」（部分 市立函館図書館蔵）

* 「オムシャ」とは、もともと和人が蝦夷地へおもむいて交易を行う折の儀礼であったが、やがてアイヌ首長以下のコタン住人を集めて心得を聞かせ、「下され物」をあたえる儀礼に変質した。（田端宏・桑原真人・船津功・関口明編『北海道の歴史』山川出版社、2000年、93項）